

詠む広場

毎日歌壇

鎌倉市 小川 求
梅雨晴や町内会の清掃除
奈良市 中島 和夫
大瓶の麦酒を並べ昭和の日
東京 鈴木 明治
雨音の二階あかるき柿若葉
久留米市 川北 敦子
万緑や倒木眠る神の池
姫路市 辰巳 擁子
草笛の聞こえて下校時間かな
葛城市 渡辺しん子
夏帽子選ぶ妻はや旅気分
東久留米市 矢作 輝
黒南風や止まったままの観覧車
倉敷市 行本 章允
これは庭これは町用夏帽子
米子市 永田富基子
更衣妻の支への在ればこそ
横濱市 斎藤 山葉
浅瀬より蟹に夢中ぞ潮干狩
西海市 まないそう
向学のたゆまぬ歩み雲の峰
横濱市 菅沼 葉二
野田市 塩野谷慎吾
闘争心老いて失せざる羽拔鳥
須賀川市 伊豆 周治
夕星の爛爛とある早梅雨
唐津市 梶山 守
短夜の海鳴りに覚め妻の里
龍ヶ崎 小宮 光司
九九復習ふ少年ふたり雲の峰
東京 伊藤 公一
志木市 谷村 康志
落し文亡き妻からの便りとも
いわき市 会沢 繁
短夜の明けゆくころを微睡みぬ
岡山市 竹原 廣子
大川に屋形船の灯夏夕べ
池田市 高倉 明子
夕焼の海に船影動かさる
桜井市 山本 椋士
梅雨冷えの鉄階段のよく響く
東京 吉田かずや

米川千嘉子 選

振り向いて確かめるには遅すぎる空に半分吸い込まれてる 三重 中山由賀子

△評▽死んで魂が空に昇ってゆく瞬間などを想像してみる。はっと気づくのだが遅い。同時に下句には陶酔感もあるか。

今日やっと体温計をしまいたる青空ながめ心びよんびよん 大阪府 岡田マチ子

△評▽熱も下がって体調が落ちついた。ユーモラスな結句はまさに実感だろう。

夫の造りしブロック・レンガの花壇あり今はこつこつわれ田に戻す 榎原市 中谷理英子

明るき顔また暗き顔入れかはる病院内の待合室は 福知山市 衣川 登代

この家に住んでと言わない意地っ張りの母を肯う咬さもありて 宇治市 清原 茂樹

赤血球みたいにしこしこ塗ませた白玉すぐに湯を浮き上がり 長岡市 三月 とあ

図書館の本を借りずに明日も来て読みたいけれど先づは働く 静岡市 柴田 和彦

先人の歌読み涙するわたしの歌で誰か笑って 金沢市 小島 和子

乾杯をするより静かに飲むビール蘇る命をどう歌にせむ 幸手市 中村 早苗

夜干しのペランダにひよんと出くわしぬとき君の笑顔のように満月 大阪市 鈴木 雅子

加藤 治郎 選

形容詞ばかりの自販機があればぼくは迷わず切ないを押す 摂津市 石少山真裏

△評▽寺山修司の作品を想起した。自販機に怖い・つらい・切ないといった文字が並んでいる。夢の場面のようなものもある。

夕立のあとに残った水たまり 靴の底から夏のはじまる 名古屋 森本 有

△評▽水たまりに靴が入ったのだろう。厳しい夏を予感させる。季節感が良い。

この船の下は竜宮城があり太郎の頭上スレスレをゆく 東京 松 あき子

「しゅる、しゅる」と二歳児がまたしゅべりだししゅるしゅるの湯たけになる 東京 稲山 博司

「運転は好きなんだ」って君は言うとおくわたしをはご横顔 東京 畑 えな

もうインターネット壊してきちゃった 喫茶店のクリーンソウタのみぢうていいね 相模原市 内山 佑樹

日の落つる地平の奥に尖塔緑の色も遠く郷に 札幌市 人子 一人

雨の奥、雨脚の奥、その奥にソプラノのごと澄んでいる闇 平塚市 芝澤 樹

少しだけずるいのがよく気の抜けたコーラ一気飲み干してあり 登別市 松本 秀

生きてきて生きてこれから生きていくバックヤードで火をつし合う さいたま市 住谷 正浩

水原 紫苑 選

アマリス遠くではと傘をひろくあなたのうしろに葬列がある 東京 岩本 遙

△評▽アマリスとあなたと葬列の3者が絶妙のバランスで見えない空間を現前させている。幻ではなく、現実の奥の詩的現実。

詩を書けばその詩が渡る橋に異国の夜を舞うヒメボタル 大阪 中村 杏

△評▽詩は異国の橋を渡って行くのか。ヒメボタルが迎えてくれるなら寂しくない。

染まりきる前の楓の葉がよぎる誰をも憎みきれぬ脳裏に 横濱市 街川 二級

水銀のやうなさみしき大球にこぼれたままの川に触れば 東京 山野ゆかり

夏至の夜の果てて美し水脈のやうにあなたの手のひらを手相 東京 吉岡 耕大

星座にはならない星を借りてきてアングレックにして歩きたい 松本市 鈴木 真理

みな目には見えないけれど荊冠を載せて心療内科に通う 千葉市 星野 珠青

光が集まって生まれた蝶ならば光へ還れ朽ち果てる前に 甲府市 村田 一広

キャンディーの包み紙 もう花みたい空が溢れてしまったみたい 岡山市 松井 度

洗濯鉄割れてはじけし白昼にナザレの人を信ぜよといふ さいたま市 住谷 正浩

伊藤 一彦 選

生命を生きたる海を生命と呼ぶことのしんどさびしき 垂水市 岩元 秀人

△評▽豊かな生命を多く誕生させた海。それなのに人間はそのことをわかっていない。結句の深い嘆きの表現が見事だ。

混雑で進みのおそい階段を水滴のごとぼたぼたおりる 東京 奥山いずみ

△評▽朝か夕の駅の階段か。比喩が面白い。ユーモアの表現はゆとりを感じさせる。

揉め事の仲裁役が入院し揉め事消えた老人ホーム 金沢市 竹内 一二

死んでいる虫を蛙は食べないと子に教えたら賢沢と言っ 熊本市 貴田 雄介

水面に浮かんだ綿雲の中に腕を突き刺し夏にクロール 宮崎 門田 藍子

はつなつの君の笑顔に射抜かれた私の胸に上がる噴水 三条市 甘 辛

みぎひだり合わせたときに手のひらに小鳥が何かものが生まれる 横濱市 あ や

許可をした覚えはないがAIが住み着いている音の回りに 札幌市 佐々木さと子

ひとり居は快なりと日々暮らしおれどそうは見えぬと息子は言いぬ 春日市 横山 辰生

インスタに許可なく掲載されている祖母の小さな皺のピフォアフター 松戸市 小林 里純

うたは奏でる

て滑りてしまふことか あるいにあえて濡れているのか。もちろん、遠いその人を思い出してまた感情が動いてしまった、というような心情の喩としても読むことができる。
・どこか遠くでわたしを濡らしていた雨がこの世へ移りこの世を濡らす 大森静佳
有名な歌だが、解釈するのは難しい。ただ、時間や空間の境界を曖昧にし、離れた場所や存在同士を結びつけるのが雨であることには、ふしぎと説得力がある。まさしく雨の歌だ、と思う。
・こんな日が前世もあった傘差して鴨をみにきたある屋下がり 笠木拓
(そのの・たろう)歌人

戦後81年「戦争・平和」の作品募集

81回目の「終戦の日」に合わせ、戦争や平和について詠んだ短歌と俳句を募集します。通常の投稿(ネットとはがき)で受け付けます。締め切りは7月31日(必着)。入選作は8月10日の本欄で掲載します。



こちらから投稿できます

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。